2003年（平成15年）9月4日（木曜日）

人生締めくくり
自分らしい最期
松島　如成
◀⑩

香典変われば葬儀も

今年6月、葬儀など老いじたくをテーマにしたNHKの番組が放映され、相談窓口の一つとして、私たちのりすシステムも紹介された。少子化や家族関係の変化の影響で視聴者の関心が高いのか、この種のテーマはテレビでも増えたように思う。

3年前の暮れ、葬儀に関する電話相談「葬送支援110番」を始めたのは「人が亡くなるのに時は選ばない、年末年始に困った人の役に立てば」と考えたためで、好評だった。以来、生前契約とは別に、毎日数件、葬儀に関する相談を受けている。

生前契約を結ぶ人の場合、葬儀は「身寄りがないので自分で準備する」という人、「葬式を出してくれる子どもはいるが、頼みたくない」「自分のことは自分で決めておきたい」という人が多いのだが、「110番」では、「金」に関する相談が一番目立つ。「香典や寺院への布施の相場はどのくらいか」「葬儀社の請求を値切ると、死者は三途の川を渡って行くべきところへ行けないのではないか心配だ」など。

実際はどうなのか。

葬儀社のベテラン営業マンに聞いたことがある。「葬儀費用の見積もりや請求は、この葬儀でどのくらいの香典収入があるか、との目星を的確につけることから始まる。葬儀の質や内容は二の次で、総額として香典収入の70～80％の見積もりになるようにする。間違っても香典収入を上回るような請求はしない。トラブルの元凶になるから」と話していた。

国内では年間、100万人弱の方が亡くなっているので、単純に計算すれば毎日3000件くらいの葬儀が行われている。「喪主」と言われる葬儀の主宰者の多くは、宴会幹事のような存在だ。財源は香典として集まったお金なので、費用の使い道については大まかな考え方になる。

故人か遺族かはともかくとして、もし、香典が集まらず、自分の財布の金で葬儀費用を払うことになれば、状況も一変するはずだ。世間体も横並び意識も見えもかなぐり捨て、慣習にこだわるよりも、適正価格、否、低価格の葬儀を選ぶ人が多くなるだろう。

その前に、香典がなければ、返礼品も要らなくなる。同時に、単なる義理での参列者も大幅に減るだろう。その結果、広い葬儀会場も要らなくなる。当然、会場や祭壇の装飾もシンプルで低価格なもので十分、ということになる。

こんな良いことずくめに見える「香典文化革命」に、消費者団体や消費生活協同組合が、なぜもっと積極的に取り組まないのか、不思議だ。

（NPO法人代表）

屋内の区分けされたスペースに整然と並ぶお墓。時代に合わせてお墓も葬儀の形も変わってきた＝東京都豊島区のすがも平和霊園で

老いじたく読本

毎週木曜日に掲載